

[特別講演Ⅲ]

入澤達吉の詩文

佐藤 保

二松学舎大学／お茶の水女子大学

【中越出身の明治期の医師】 講演者の出身地である中越地方から出て明治期に医師として名を成した者に、池田謙斎(1841～1918)、長谷川泰(1842～1912)、入澤達吉(1865～1938)がある。池田謙斎は蒲原郡西野村の医家入澤家に生まれ、適塾に学び独逸留学を経て初代東京大学医学部総理となったが、漢詩文をほとんど残していない。長岡藩医の家に生まれ漢学塾長善館に学び私立済世学舎の設立者として知られる長谷川泰は、蘇山・柳塘などと号し詩文に堪能で、「柳塘餘滴」(『長谷川泰先生全集』1939年刊)は時事を諷諭した詩を取っていて特色がある。池田謙斎の実兄恭平の長男入澤達吉は、医学の傍ら詩文・和歌・川柳などを能くし、特に漢詩を好み『雲莊詩存』を残しているので、医学界屈指というべき入澤達吉の漢詩文について紹介しよう。

【入澤達吉の略歴】 1876年に叔父池田謙斎の薦めによって12歳で上京した入澤達吉は、日尾竹陰に漢学を学び、翌年11月に東京大学医学部予備四級に入学。同級の田代義徳と共に馬杉雲外に入門して漢詩を学び、雲莊と号した。また1887年から北越医会々報の編集に従事した。1889年に帝大医科を卒業し、1890年に独逸に私費留学してストラスブルクとベルリンに学び、1894年帰朝。1895年帝大医科助教授となり、1897年海軍中將中牟田倉之助の三女常子と結婚。1899年医博。1901年教授昇任(内科学第四講座)。傍ら東京養育院医長を兼勤(1897～1902)。1906年渡清して清末官僚周馥の男を治療、また中国での病院建設計画に参加。1912～13年各国の病院状況視察のために欧米周遊。1923～24年には外務省の対支文化事業委員として中国各地の文化施設を視察。1925年に定年退官後、同仁会副会長。1928年日本医史学会設立に参加し、初代理事長呉秀三の歿後、第二代理事長となる。

【入澤達吉の詩文】 入澤は健筆家で、専門である内科学関係論文以外の文章についても浩瀚な『入澤先生の演説と文章』(1932年刊)が編まれ、その文業を知ることができる。ジャンル別に①演説・論説及式辞30編、②医制及教育14篇、③医事及衛生15編、④随筆7編、⑤伝記6編、⑥紀行9編、⑦追憶及回想18編、⑧序文及題跋35篇、⑨短篇34篇、⑩尺牘15編、⑪新聞通信8編、⑫墓誌3編が収録される。「伝記」では、佐渡出身の医学者・独逸語学者司馬凌海の歿後50年にあたって起稿した「司馬凌海伝」(1929年)の文末に、その詩稿から佳作20余首を選んで載せる。「追憶及回想」では、「笠原光興博士を悼む」(1913年)・「医学士渋谷周平君を偲ぶ」(1919年)・「森鷗外博士のおもひで」(1922年)において故人の詩歌を記憶するままに引用するなど、詩歌に対する嗜好の深さを物語る。「随筆」に収められた中国出張時の「倭村漫筆」(『同仁』誌連載)や「紀行」に収められた欧州留学中の見聞、また諸家に宛てた「尺牘」にも、しばしば自作の漢詩が添えられている。「墓誌」としては「川上元治郎墓誌銘」「謙斎池田君墓碑銘」「医学博士宮本叔墓表」を取る。

『雲莊詩存』(1932年上海・仿古印書局刊)は入澤の1880～1931年(明治13～昭和6)、52年間に及ぶ詩作254首を収録する。10首以上の詩が採られている年は、1885年、1888年、1890年、1894年、1906年、1924年、1925年、1928年、1930年であり、上記の略歴に照らすと、東大医学生時代、独逸留学時の往復、中国出張の年、定年退官後に多く詩作した傾向が見られるが、漢詩結社に所属し生涯に亘って作り続けている。外国旅行中の作が多く、また郷里の中越を詠じた詩も多い。1918年に帰省した時の所作、七絶「過見附駅 纒出都門心自閒/秋風一路故郷還/雨晴木末浮青黛/莫是多年夢裏山」は、『大正詩文』

7巻1号(1919年)にも掲載された(異同あり)。1921年10月22日に開かれた東大教官在職25年記念祝賀会の折の所作「秋懐三首」に対して、181人の次韻詩等を集めた『秋懐唱和集』(1927年)が刊行された。1937年には長野県入澤村松原湖畔に詩碑が建立された。